

平成27年5月15日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土博物館（青梅市駒木町1-684 TEL0428-23-6859）

青梅宿に來た巡見使

『御巡見様御宿後來心意書』この古文書は天保九（1838）年四月二日に青梅宿に來た巡見使について後世に再び來訪した時のために奥野忠左衛門が書き記したものである。その後、巡見使は來ることがなく時代は明治になってしまったが、この書は巡見使が來というお触れがあつてから名主不在のなか、約6ヶ月に渡る準備に慌てる様や無事出立するまでの様子が事細やかに書かれておりとても興味深いものです。又、この文書は奥野さん個人蔵非公開の文書ですが数年前、古文書の会で勉強の為に特別に見せて頂きました。

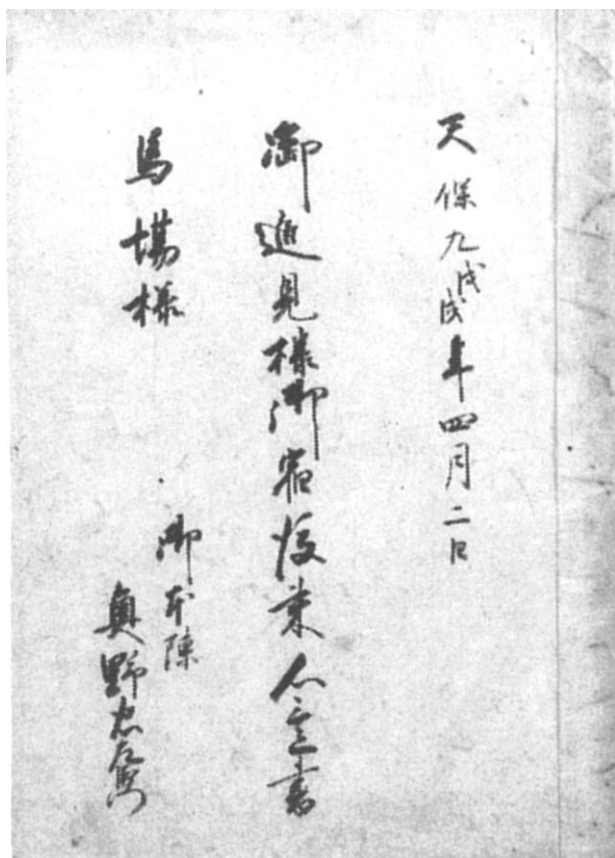
天保八（1837）年四月朔日江戸城にて將軍の宣下があり十二代將軍徳川家慶の代となり天保八年十月廿二日に御代官江川太郎左衛門様御役所より次のようなお触れが出る

一、当暮より來春にかけ諸国巡見が行われるが宿村は差支えなく出来るかどうか

一、天明年中休泊村および上下人馬継立員数を申し出ること

一、天明年中の古き書き物等取り調べ晦日までに出来るかどうか申し出ること

このお触れが青梅に届いたのが十月廿五日であつた。その時名主である弥左衛門は新町との市争いの為、江戸に出府していて留守であつた。其の為年寄勘右衛門と隣村大惣代乗願寺村源左衛門の両名で急ぎ最寄五十五ヶ村へ廻状を出したのである。そして村内では年寄十郎左衛門・同与三左衛門・忠左衛門達が栄蔵宅に集まり、受け入れについて相談し江



川太郎左衛門の役所へ受け入れられる旨を日限の晦日までに申し出た。十二月には休泊の宿村へ家作・畳替・道普請等しないようにとのお触れが出る。翌天保九（1838）年二月十四日には代官所より村絵図・人別帳・石盛取永等の書類の提出のお触れがあったが、これは年寄十郎左衛門宅にあるので問題はなかった。二月七日に名主を含め村役人六人で集まり相談した結果、村役人だけでは手が廻らないので旧家重立たる者、小前の手廻りの良い者の人選役割決め、後世の為に詳しく書き留めて置くことなど決めた。又、宿に関しては名主役が引き受ける事とした。

一、使番	安藤治衛門様	御本陣	榎本栄蔵
		下宿	守屋伝右衛門
一、小姓組	馬場大助様	御本陣	奥野忠左衛門
		下宿	根岸清兵衛
一、書院番	内藤源助様	御本陣	根岸国太郎
		下宿	同 喜右衛門

以上のように決定したが、忠左衛門宅は二階家であるが大丈夫であろうかと心配していたが、丁度下師岡の名主千右衛門が江戸に行くので二階家でも良いか聞いてきて欲しいと頼むと二月廿七日に飛脚にて二階家でも差支えないとの連絡をうける。するとすぐに湯殿や雪隠の普請にとりかかった。又、村役人から門が古いので建て替えた方が良いと云われ、三月廿五日より昼夜に限らず普請をし、巡見使到着の前日によく出来上がり、ぎりぎり間に合ったのである。

巡見使は三月廿三日に相模国愛甲郡三増村よりの先触れで同廿六日夜十二時頃、拝島村よりの知らせで青梅には四月二日に来る事に決まった。翌日の廿七日からそれぞれの宿で普請を急いだ。又、廿九日から巡見使が通行する道である笹門から根岸国太郎宅前まで、巾六尺に渡り敷き砂させ、笹門黒門とそれぞれの御本陣の門の前に弐つずつ盛砂をしている。

前日の四月一日には前泊である八王子宿に年寄勘右衛門外一名が袴持参で、翌日の宿泊予定の本陣と下宿の報告をしながらのご機嫌伺いをするとともに八王子宿の様子もみて八時頃に帰宅している。

いよいよ当日、四月二日は快晴であった。巡見使一行は予定通り八王子宿を出発し拝島宿で昼食、此の所まで役人三人が迎えに行き、昼十二時頃遠見の者が駆け戻り行列の先頭

がみえたとの報告が入ると、名主が出府中のため代兼年寄十郎左衛門並びに御本陣の三名は麻袴着用し、又、下宿三名は袴着用にて笹門黒門際に下座して待っていると、まず荷物がきたので、それをそこに待機させていたそれぞれの宿の荷物受取役のものに案内させ、御本陣にいる役人に渡し帳面に控えるように指図する。十二時半頃、馬場様御宿見の為御給人加勢要之進・中小性山中狸市郎様が本陣である奥野宅を座敷・湯殿・雪隠まで細かく見聞してから、門に幕を架け紋入りの台提灯を二張り建て、門へは 馬場大助泊 と関札を掛けた。又下宿には馬場大助下宿の札が掛けられた。いよいよ行列の到着である。まず最初に馬場様の行列総勢四十三名・人足百人余りには年寄弥五右衛門が先に立案内し、続いて安藤治衛門様総勢四十三名・人足百人余りには年寄与三左衛門・御本陣栄蔵麻袴着用にて案内する。最後に内藤源助様総勢三十七名人足百人ばかり年寄勘右衛門・御本陣国太郎麻袴着用し案内している。

さて奥野家陣屋では家の前に組合の者四人が袴着用の上、下座して待ち、荷物差配人二人も下座して待っているところに拝島より継来たる人足百人余りの荷物を六人で受け取り、次の日に積み残しのないように帳面に記帳するため大変混雑した。又、馬場様一同をそれぞれ部屋に案内すると、空いている部屋は茶の間だけだったので、そこを居間にして最寄の村々六十三ヶ村の名主からの書類を受け取り御用部屋への取次をすることとなった。玄関を白洲にしそこに七、八か村宛呼び出される。白洲は午後三時頃から午後八時半頃までかかった。その間に、明日三日のお昼村と泊村の者もご機嫌伺いに来ている。御用人はそれから調べものをし、十二時頃お休みになり、朝は四時半頃には起きている。用人の忙しさも然ることながら、忠左衛門も行列が着く前から翌出立まで麻袴を着続けて御用取次通し甚だ骨が折れ疲れた様子が窺える。

四月三日朝八時御三方御機嫌よく御出立。先ず内藤様をお送りする為年寄勘右衛門・御本陣国太郎・下宿喜衛門の三人が又、二番安藤様お送りの為年寄与三左門代倅浦助・下宿伝衛門の三人、そして最後に馬場様のお送りには年寄弥五右衛門が袴着用にて先頭に立ち、御本陣忠左衛門倅与三郎・下宿清兵衛は一刀を帯び小袖着用腹引脚絆に草鞋姿で行列に加わり、忠左衛門は麻袴着用にて行列の中程に並び今日の昼飯村である高麗郡梅原村（現日高市）まで道案内を兼ねて送っている。

この一泊二日の巡見使の宿泊を担当する事は大変な重責であると共にその村にある程度の経済力がなくてはならないのである。普請などしなくても良いとお触れはあったもの

の、実際はそういう訳にもいかず門を建替えたり、畳替えや障子の張り替え・湯殿や雪隠・道普請もしている。又、飲食その他の諸費用も掛っているのではあるが、巡見使一行の儉約振りも垣間見ることが出来る。到着時に江戸より調達した菓子を出したが召し上がらず、朝梅干しに砂糖をかけて出すが、三食以外は召し上がらないとの事、食事は一汁一菜で平皿には五品位と思い用意するも三品にするように指示されている。又、殿様は夜具・御膳碗茶碗・金たらいまで持参しているのである。

その四百人を超える行列を見物しようと遠近の老若男女が夜の内から詰めかけ宿内は申すに及ばず西分村、乗願寺村、師岡村辺りまでも道々両脇に下座しお通りを見物しに来ている。そして何より「御着き」から「御用向き」に至るまで「恙なく致し」、「御機嫌よく出立」されたのでほっとひと安心した様子が目に浮かぶようである

(文責 儘田 小夜子)

参考文献：安藤精一（昭和 59 年）『青梅宿の本陣』（多摩郷土研究 第 58 号）